

立原正秋全集

第九卷

立原正秋全集

第九卷

角川書店

立原正秋全集 第九卷

昭和五十八年六月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替東京三一―九五二〇八 ㊦一〇二

Printed in Japan 0393-573409-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集

第九卷

目次

劍と花

五

解題

武田勝彦
四六五

剣と花

第一章

一

鎌倉山の南端、相模湾を一望のもとに見おろす一角に、けやきはな 櫻ヶ原とよばれている高台がある。

鎌倉山を東西に縦断している市道を途中から左に折れ、車一台がや々と通れるほどの雑木林の山路を南西に千メートルほど入ると、忽然と左側に視角がひらけ、海が見える。そして、右側の松、櫻、椎の樹木に囲まれた高台に、一軒の豪壮な屋敷が建っている。ここが石津屋敷であった。

十年ほど前まで、この屋敷には人の出入りが繁かったが、当主の石津武一郎が石津産業を引退してからは、にわか客足がへりだし、いまは訪れる人として稀である。

十一月の末、櫻ヶ原では、木々の枝から黄ばんだ葉がしきりに落ち、石津屋敷は秋の陽に薨が照り映えていたが、あたりは深閑としていた。

石津屋敷には塀というものがなかった。屋敷を中心にひろがり起伏している広大な山林が石津武一郎の土地であった。

いま、右手に木刀を杖がわりに握り、櫻ヶ原を散歩しているのは、今年八十歳になる石津武一郎である。結城紬に白足袋のよそおいで、短く刈りこんだ白髪、ながく白い眉毛の下には、鋭い目が光っている。長身瘦軀、まさに枯木

のような風貌であるが、足腰がしっかりしていた。

かたわらにつき添っているのは、五十四歳になる田代雪子で、二十五年前、武一郎の妻の清子が亡くなって以来、武一郎の身のまわりの世話をしてきた女である。

「あれはなんじゃ？」

武一郎は不意に足をとめると、耳をすました。麓の稲村ヶ崎あたりから、ゴオウという戦車のような響きがきこえてきたのである。

「はい、なんでも、山を切り崩して、宅地をつくるとか、そんな話を耳にしましたが、ブルドーザーの音ではないでしょうか」

雪子が答えた。

「馬鹿な奴等だ。また山を崩しているのか」

武一郎はしばらくきき耳をたてていたが、馬鹿な奴等だ、ともう一度つぶやくと、しずかに歩きだした。

「なんでも、船会社が宅地造成をはじめたというような話でした」

「船会社が？　なんという船会社だ？」

「飯倉海運とか……」

「業績のよくない会社だな。海で仕事をしなければならない連中が、陸の上で、しかも自然を毀してまで金儲けをするなど、よほど頭の悪い人間がそろっている会社だろう」

武一郎は隻腕であった。いまから二十七年前、つまり昭和十三年の夏、張鼓峰^{ちやうこほう}で日ソ軍が衝突したとき、左腕を迫撃砲弾で吹き飛ばされたのである。そのとき彼は陸軍少将であったが、隻腕になったのを機に退役した。彼が石津産業を興したのはこのときであった。

彼が興した石津産業は、はたから見ると一風変っていた。彼は、戦場で片端になった部下をあつめて社員にしたのである。発足当初、石津産業は、軍に品物を納める御用商人であったが、終戦をさかいに、武一郎の長男である信一

郎が、貿易商に切りかえた。

「山を切り崩すとなると、一年はかかるでしょうね。うるさい音がここまで響いてこないといいんですが」
雪子が言った。

「なに、戦場のことを思えば、たいした音ではない。わしは、さっき、あのブルドーザーの音を、戦車の音かと思つた」

武一郎は再び足をとめると、麓からきこえてくる音に耳をすまし、一瞬、過去をふりかえる遠い目を見せた。軍靴の響き、疾走する軍馬の蹄の音、炸裂する砲弾の閃光……そこには、彼の過去の栄光と悲慘のすべてが凝集していた。商人としての彼のちからは、やはり或る程度は軍人としての過去の栄光によるものであった。彼に商才があったわけではない。彼は勇氣ある男であった。彼の栄光はすべてこの勇氣の賜物であり、悲慘もまた勇氣の所産であった。

「戻ろうか」

武一郎はふと現実に戻ると、ゆっくりきびすを返した。歩いている彼の姿は、左腕の袖が動かない。着物をきていると腕が無いというのがすぐはわからない。ちょっと懐手をしているように見える。

二

石津屋敷の広い居間には、終日煖炉に薪が燃えている。煖炉のかたわらには黒い皮ばりのどっしりした椅子が置いてあり、武一郎は起きているときはたいがいこの椅子に掛けて日を過ごしていた。

そして彼の掛けている椅子の背後には彼の過去の栄光を物語るいくつかの品物が並べてある。まず、壁にかかっている油絵の肖像画は、彼が陸軍少将時代のもので、胸にはいくつかの勲章がさがっている。壁を剝りぬいてこしらえた棚には、鎧と冑よろい かぶとがおいである。これは戦国時代の武将であった先祖の遺品であった。そのかたわらに立てかけてある大小二本の刀も先祖の遺品であるが、いずれも、剣道七段の彼に相応しい品であった。

このほか、前に突きだして造った棚には、軍人としての彼を物語るさまざまな品が並べてあった。薄暗い室内に、それらの品は、まるで亡霊のように武一郎の背後に控えていた。

武一郎には六人の子がある。長男の信一郎が五十歳で石津産業の社長、長女の美枝子はある貿易商に嫁したが、三人の子をのこして三十九歳で病没、次男の幹次郎は三十五歳になり、これは化学者で、現在、ある大学の理学部の助教授を勤めており、次女の勢伊子は三十二歳で映画女優、そして三男の文三郎は三十歳になり、これは遊んで暮らしている。もう一人の子、二十四歳になる千代子は、田代雪子とのあいだに出来た娘だが、これは母娘とも武一郎の籍には入っておらず、千代子は武一郎が認知した子になっていた。

この六人の子のうち、現在、石津屋敷に居るのは、次男の幹次郎と千代子だけである。ほかはみんな、息ぐるしいと言って家を出て一戸をかまえていた。

きょうだいが息苦しいと言っているのは、父親の過去の栄光のことであつた。事実、きょうだいの中で、父親を超える勇氣ある者は一人も出ていなかった。

武一郎は、下男の老爺が煖炉に薪をくべているのを眺めながら、ろくな子がいなと思う。長男は平凡な男であつた。すでに三人の子があり、東京の田園調布に家をかまえていた。病没した長女も平凡な女であつた。次男は、化学者らしく冷静な男であつたが、陰気な性格で、三十五歳の今日まで独身だというのも、考えてみればおかしかつた。女優になつた次女は、きくところによると、すでに数度も男をかえており、いずれはスキャンダルに埋もれて世を終えるような女であつた。もし自分の勇氣をすこしでも享けた子がいるとすれば、それは末子の文三郎であつた。剣道三段の腕前で、弓と乗馬をやっていたが、いけないのは、鎌倉駅前でバーを経営している年上の女と同棲していることだつた。大学では農学部に籍をおいていたが、なんのために農学をまなんだのか判らなかつた。

そして現在、武一郎の寵愛を一身に受けているのは、田代雪子がうんだ千代子であつた。

しかし、ろくな子がいな、と武一郎は思う。ものになりそうなのは文三郎だけであつた。自分の若い頃に似て喧嘩早く、義理人情と政治的な人間関係のつながりを唾棄している性格も自分によく似ていたが、しかし三十にしてま

だ飄々としてゐるようでは、先が判らなかつた。

「急に寒くなりましたなあ」

老爺が薪をくべながら言った。

「細君は元気か」

「はい、おかげさまで……」

「しかし、おまえも元気だな」

「閣下より二十も若いわけですが、閣下の方が元気でございますよ」

「わしより二十も若いおまえが、そんな弱音をはくのはおかしいぞ」

「まったくでございます」

老爺は石津屋敷の西側に一戸を構えていた。子はなく、働きものの細君は彼より四つ若く、この夫婦者は、石津屋敷ではなくてはならない人物だった。一年間風呂と煖炉に燃す薪の伐りだし、野菜畑の手入をこの夫婦がやっていた。名を三芳勘七といい、武一郎が退役のとき、従卒だったのを連れてきたのである。

やがて薪をくべ終えた老爺が居間から出て行き、入れかわりに雪子が入ってきた。

「どうしてもあなたに会いたいと言っている男が、三人きっているんです」

と雪子は言った。

「わしに会いたい男が三人？ 何者だ？」

雪子はちよつとためらっていたが、前夜、駅前のパールで文三郎が三人の愚連隊を木刀で殴り倒して怪我をさせ、現在、文三郎は警察署の留置場に入っており、三人の愚連隊はいずれも外科病院で手当を受けている、と語った。

「またやったのか」

武一郎は驚いた様子も見せなかった。

「今朝方、刑事が二人見えました。なんでも愚連隊の方が最初にあいくちヒ首で文三郎さんに切りつけたとかで、悪いのは

文三郎さんではないらしいんです。あなたに心配をかけては、と思い、だまっていたが」

「文三郎に殴られた三人が来たのか」

「いいえ。三人はいずれも十日から一か月の重傷で、病院から出てこれません。兄弟分だという男達です。追いかえそうとしたのですが、どうしてもあなたに会わせろ、とすぐむもので。人相がよくありません」

「会おう。ここに連れてこい」

「はい。人相がよくありませんから、お氣をつけてください」

雪子が出て行つた。そして間もなく、三人の男を従えて入ってきた。

三

三人の男はいずれも三十歳前後の青年で、雪子の言う通り、いずれも人相がよくなかった。

「あんたが石津文三郎の親父かい？」

なかの一人が、熨斗の前のソファにどかと腰をおろしながら言った。あとの二人も、それぞれ勝手にソファに腰かけ行儀の悪い姿勢を見せた。

「おまえ達、土地の地廻りか」

武一郎は最初の男に訊いた。

「本部はお江戸にある正義党よ」

「正義党、なるほど、暴力団だな。暴力団が正義党を名乗るのはおかしいじゃないか」

「うるせえなあ、この爺い。俺達はおめえの息子のことで話しあいに来たんだ」

「うるさいッ！ 馬鹿者ども。人の家に入ってきて挨拶もせず、それにその姿勢はなんだ」

武一郎は一喝した。

「俺達にお説教する気かよ。俺達の舎弟達がおまえの息子に殴られていま入院しているんだ。その話で来たんだ」

「話は警察でやれ。だいいち、わしは、おまえらのような礼儀知らずで頭の悪い奴等とは話しあえん」

「爺さんよ、本気でそんなこと言ってるのかい」

男がちょっとすごんで見せた。

「帰れ、野良犬ども！」

「なんだと、野良犬だと！ 年をとっていると思ひ、こっちはおとなしく出ているんだ。話しあいに応じないというのは本気で言っているのか。もう一度返事をもらおうじゃないか」

「話は警察でやれと言ったはずだ」

「そうかい。爺さん、お宅に可愛い娘がいたな。どういふことになるかな」

「いまなんと言った。もう一度言ってみろ」

武一郎は右手の木刀を杖にして椅子からたちあがった。

「兄貴、気をつけろよ。この爺いも木刀を握っているぞ」

別の男が言った。

「冗談じゃない。こんな爺いになにが出来るか。おい、爺さん、もう一度言ってみろ。お宅に可愛い娘がいるね。その娘がどういふことになるか、と言ってるんだ」

「雪子、警察を呼べ」

武一郎は背後に立っている雪子に命じた。

「警察？ よしてくれ。俺達は話しあいに来たんだ」

「兄貴、かまわないから、その爺いに一発かませろよ」

「動くな、警官が来るまで、おまえ達そこを一步も動くな。動けば木刀が飛ぶぞ」

武一郎は三人の前に立ち、木刀を正眼にかまえた。

「兄貴、この爺い、片腕だ。早えとこ一発かましてずらかろう」

ともう一人の男がソファからたちあがろうとしたとき、武一郎の木刀がその男の左肩に打ちおろされ、男はへなへたと坐りこんだ。

「動くなと言ったはずだ。雪子、電話をしたか」

「はい、いたしました」

「では勘七を呼べ」

このとき、雪子のうしろから、閣下、ここにおります、と言いながら、木刀を握った勘七が進みでた。

「よし。こいつらを見張っておれ。わしは煙草を喫むから」

「はい、閣下、承知しました」

勘七は男達の背後にまわると、木刀を上段にかまえ、裂帛れきの気合とともに木刀を左にいる男の頭上に打ちおろした。しかし木刀は頭上一寸のところどとまった。勘七は三人の男を次々にこのようにして威圧した。

「その男はわしの剣の高弟だ。動けば首がとぶと思え」

武一郎は椅子に戻ると膝掛けをかけ、サイドテーブルからパイプをとりあげ、煙草をつめた。

「爺さん、こんなことをしたら、後でどうなるかくらいは知ってるだろうな」と最初の男が言った。

「どうなるね」

武一郎はパイプに火をつけながらわらっていた。

「正義党の本部には剣道五段の兄貴が数人いるんだ」

「わしは七段だ」

武一郎はあらためて目の前の三人の男を眺めわたすと、いずれも頭の悪そうな奴等だな、と思った。「兄貴、こうしてポリ公が来るのを待ってるのかよ。木刀なんてたいしたことはねえ。ずらかろう」